

## 身延山本『宝物集』について

龍 門 義 通

### 一、はじめに

日蓮聖人は法華經の教えや自己の宗教的法悦を様々な比喩や説話をもって語られている。ところで、日蓮聖人門下には幾つかの『宝物集』が伝えられている。すなわち、静岡県三島市岡宮光長寺<sup>(1)</sup>。京都瑞光寺<sup>(2)</sup>、本能寺<sup>(3)</sup>、神奈川県最明寺<sup>(4)</sup>、身延山には「抜き書本」が現存している。このことは日蓮聖人門下が盛んに説話を法華經の弘通に用いられていたことを物語るものである<sup>(5)</sup>。

身延山久遠寺に伝えられている『宝物集』は身延山第十二世の日意上人の手によるものである。この底本について小泉弘氏は次のような指摘をしている。

抜き書きされている身延山本の二三五首は古典本所収の歌と百パーセント合致している訳なのである。

そして、単なる数の上での合致のみならず、これらの歌がその配列の順序、歌詞の面でも一致していて、身延山本もまた、第七類に属する祖本を抜き書きしたものであることは決定的といつてよからう<sup>(6)</sup>。

この指摘に注目したのは爪生等勝氏であった。すなわち、爪生等勝氏は身延山本と『宝物集』諸本と改めて比較対称し、そして、身延山本は小泉氏のいうように「古典文庫」所収の第二種七卷本と必ずしも合致する訳ではないことを指摘されるのである<sup>(7)</sup>。また、諸本を対称してみると十箇所が片活三卷本と類似する説示となっており、このことより、身延山本は第二種七卷本に類似することは否定できないとしながらも、片活三卷本とは兄弟関係にあると思えることを指摘されるのである<sup>(8)</sup>。

さらに、この指摘に対し小泉氏は次のように述べている。すなわち、小泉氏は『古鈔本宝物集』研究篇におい

て、改めて諸本を比較対照し、「身延山本」はやはり第二種七巻本に属するものであることを再確認されるのである(9)。

ところで、身延山本は「書く抜き本」である。すなわち、書き手である日意上人は話の内容に応じ不必要と思われる説話の省略、あるいは増補を行い、さらに不適切な表現がある場合には本文改正を行っている。つまり、そこには日意上人の書き抜きの姿勢が表れているものと思われる。諫言すれば、どの様な話を書き抜かれ、あるいは、捨てられたかという説話選択の理由を探ることは日意上人の書き抜く目的、書き抜きの意図を知ることができると思われるのである。このことについて、小泉氏は次のように指摘している。

久遠寺本の省略箇所やその量、並びにこれらを省略した理由の考察等も今後の問題となろう。それは主として同系に属する諸伝本との対称によってなされるべきであるが(10)、

と、日意上人が本文中に施された注記に注目しそこより、日意上人の書く抜きの姿勢を考察することの必要性を指摘するのである。

さて、本稿は小泉弘氏のこの指摘に基づき第二種七巻

本の最古のものである「光長寺本」、さらに「九冊本」を「身延山本」と比較対称し、どの様な話が省略されているかということ、あるいは、どのように本文校正が行われているかということ、すなわち、『宝物集』の法華経化を明らかにすることによって日意上人の書き抜きの姿勢を探って見たいと思う。

## 二、書誌

身延山本『宝物集』は上下二冊の七巻本であり、上巻の外題には「宝物集抜書上自一至三」下巻外題に「宝物集抜書自四至七」とある。また、本文中には「第一之分」「第二之分」「第三之分」等々、分巻を示す小見出が付けられている。

小泉、吉田幸一両氏の調査に従うと、上巻は縦二六、七横一八、三cm。袋綴の冊子本。墨付六八丁。前後に本文と同じ料紙を一枚づつ入れて表裏としている。一面十行、片仮名混。下巻は縦二七、七、横一八、四cm。美濃判大の仮綴本。両面書で、墨付七五枚、小口で数えると百五十面。一面九から十二行でなる。表紙は後世の物らしい(11)。

また、身延山には日意上人自筆本一組とそれを書写し

た物一組があり、それがいつのまにか一組が上巻は日意上人の自筆本、下巻が書写本。もう一組は上巻が書写本、下巻が日意上人の自筆本の組合せとなり、そのうち前者のみが現在に伝えられているようである<sup>(12)</sup>。

下巻奥書には「御本云 延徳三年辛亥九月十八日書写了 日意在御判」とある。この延徳三年（一四九一）は日意上人京都妙伝寺貫首の時である。

さらに、本文には随所に日意上人の注記が認められる。上巻の注記は「私云」で始まるが、下巻は「意云」となっている。そしてこれらは頭注、行注、あるいは末尾になされるが、下巻は「意云」となっている。そしてこれらは頭注、行注、あるいは末尾になされているものである。

### 三、日意上人の書き抜きの姿勢

さて、「身延山本」を「光長寺本」と「九冊本」に比較対照してみた。そして、日意上人が法華経の教理思想に基づいて省略、あるいは校正を施した例、すなわち、『宝物集』の法華経化ともいえる顕著な例を四つに限り挙げてみた<sup>(13)</sup>。

一、語句の入換について

「往生極楽」と「臨終正念」  
身延山本

さて、御堂に集まきて見ば、聞きしにもたがはず、多くの人集まりて、稲麻竹葦のように待るめる、西のつぼねの中に入りて、南無大恩教主釈迦牟尼大覚世尊大覚滅罪生善臨終正念とふし拝みて、法華経の覚えさせ給える所々うち読みて（一卷一ウ）

光長寺本

さて、御堂にまいりつきて見れば、実にききしもたがはず、おおくの人あつまりて、稲麻竹葦の様にぞ待める、西のつぼねの内にいりて、南無大恩教主釈迦牟尼、無上大覚世尊、滅罪生善、往生極楽（十七頁）

九冊本

さて、御堂に集まりて、稲麻竹葦の様にぞ待るめる。西の局の内に入て、南無大恩教主釈迦牟尼、無上大覚世尊大、滅罪生善、とふしおがみて、法華経のおぼえたる所々打読て（十七頁）

二、省略について  
身延山本

天二五行アリ。金其中ニアリ。地二七宝アリ、金ヲ

初トセリ、仏ヲ金人ト申。御門ヲ金輪聖王トナツク、聖徳太子ノ吾朝へ来リ給シニハ、金色ノ形ヲ現シテコソ、用明天皇ノ后ノ腹ニ宿リ給ケリ、又、天竺、振旦ノ人、金ヲ宝ト思スヤル待ル、(二卷五才)

光長寺本

天ニ五行アリ、金中ニアリ、地ニ七宝アリ、金ヲ始トス、仏ノ御言金言ト云ヒ御門ヲバ金輪聖王ト申也。神ニ金峯山、御経ニ金光明経有、金ヲホムルユヘナリ。シカノミナラズ、聖徳太子吾朝へ来タリ給ヒシニハ、金ノスガタニテコソ用明天王ノキサキノ御腹ニハ宿リ給ヒケル、贈中納言紀広相、真言習テ首楞嚴院ノ勸印供奉ニテ申シマケ<sup>マケ</sup>ルモ、君ハ三密ノ金玉鉢未ダ傾トコソハ申テ待ケレ、天竺抓旦マデモ、金ヲ財ト思フ事ヲミク待メル。(二四頁)

九冊本

天に五行有、金其中にいたる。地に七宝あり、金をはじめとせり。仏を金身と申、神に金峯山おはします、経に金光明経あり、御門を金輪上皇と申。加之、聖徳太子の吾朝へ来り給ひしには、金色の形を現じてこそ、用明天皇の後の腹に宿り給ひけれ。又、池上の皇慶阿闍利が仏供養しけるに、寛顔<sup>マヤ</sup>供奉を当寺

に請じたりけるにも、君は三密の山の金ゆはちをかたづけず、とこそ申たりけれ。仏も是を宝とおもひ給へり。智者も是を宝と云。金の宝なるが故に、みな金の字をぐしたる也。又、天竺震旦の人、金を宝とする事(二三頁)

三、敬語について

身延山本

無尽意菩薩ノ供養セシ玉ノ瓔珞、観音スラニ二分テ釈迦、多宝ニタテマツリ給、何況、末世ノ此比ノ人、アニ宝トシテ持テル事アランヤ。(卷一八ウ)

光長寺本

無尽意菩薩ノ観音ニ供養シ給ヘル玉、宝珠瓔珞ナムドセハ、尺迦多宝ニタテマツリキ、弘法大師ノ惠果和尚ノ手ヨリツタヘシ玉、タモチガタクシテ高野ノ山ニウツミ給ヒキ (二八頁)

九冊本

弘法大師、惠果の手より伝へ給ひし玉、持がたくして高野に埋<sup>マミ</sup>み、役の行者の儲がたくして得したま、玉き宿におさめてき、無尽意菩薩の供養し給ひし玉瓔珞、観音すら釈迦、多宝に参らせてき、(三二頁)

四、内容の校正

身延山本

仏滅後二、阿難、道ヲ行ニ、小沙弥ノ法花経ヲ読ケルカ、声ノ悪シカリケレハ、聞ナカラナヲセヌハ仏ノ誠メ給シ事ナレハ、声違ヘル由ヲ直スニ、沙弥嗔リヲ成シテ、吾師八年若キ人ナリ、ヨモ僻事ヲヘ教ヘ給ハシ、(五卷二一才)

九冊本

如来滅後に、阿難、道をゆくに、小沙弥法鼓経をよみけり。声のあしかりければ、きこながらなをさぬをば、仏のいましめ給ひし事なれば、正しくたがへるよしをなすに、沙弥いかりをなして、我師は年老たる人なり、よもひが事をばし給はじ、(二四八頁) さてまず一の例は話の導入部分からである。早くもここから日意上人は「極楽」という言句を「臨終正念」に変えられている。これは明らかに日意上人が法華経の教理思想を意識されて行ったものである。

そもそも『宝物集』は嵯峨清涼寺で泊り客が、何物が宝であるか、ということをや通し討論する話である。話は宝とは「隠蓑、打ち出の小槌、金、珠、子、命」と順に六つを挙げるが、最後には仏道こそが宝であるとし、そして弥陀を讃念して往生を願うものである。

つまり、『宝物集』全体の趣旨からいえばやはり「極楽」という言句が本文にふさわしく思われるのである。が、日意上人「臨終正念」と変えられている。これは明らかに日意上人の校正によるものであり<sup>(14)</sup>、『宝物集』の法華経化と見ることはできるのではなからうか。

二の例は「身延山本」と「光長寺本」「九冊本」ではそれぞれに細かい説示の違いがあるが、特に「身延山本」では不必要なことは省略されていることに気が付く。すなわち、「身延山本」で示されている語句は「天、金、地、仏」である。しかし、「光長寺本」と「九冊本」ではこの他に「金峯山、金光明経」の語句が認められる。これらは日意上人があえてこれらは必要なしと見なされ、これらを省略されたのであろう。

さらに、「光長寺本」と「九冊本」の説示では「三密の山の金(三密ノ金玉鉢)」の記事が認められる。しかし、「身延山本」ではこの記載はない。

このような「身延山本」を「光長寺本」、あるいは、「九冊本」と比較してみると、そこには省略されている箇所があることが伺えるのである<sup>(15)</sup>。また、省略されている内容は法華経の教理思想とは関わりがないものであるといえよう。

三は省略と併せて敬語の校正が認められる例である。すなわち、「光長本寺」と「九冊本」はともに弘法大師が恵果から伝えられた珠を高野山に奉めたのこの記事を説示しているが、「身延山本」にはこの記事は認められない。さらに、「光長寺本」では「無尽意菩薩ノ観音ニ供養シ給ヘル玉」「九冊本」では「無尽意菩薩の供養し給ひし玉瓔珞」と、ともに「無尽意菩薩」に対して敬語が用いられている。一方、「身延山本」では「無尽意菩薩ノ供養セシ玉ノ瓔珞」と敬語は用いられていないのである。

このように「身延山本」では弘法大師の記事は省略し、また、「無尽意菩薩」に対しては敬語を用いていないのである。すなわち、日意上人は書き写される際にある程度不必要な内容を採用されず、また、諸尊に対する語句も校正を行っているのである(16)。

ただし、このような諸尊に対する敬語の校正は必ず行っている訳ではない。ここでは「釈迦多宝」の二仏が「無尽意菩薩」と同時に登場し敬語が用いられている。これのことが「無尽意菩薩」に対して敬語を省略させたのではないだろうか。いずれにしても、日意上人の釈迦仏に対する姿勢のあらわれとして考えることができるの

ではあるまいか。

四、この説話は天竺説話である。話の内容は、如来の滅後に阿難が摩竭陀国を行くと法華経を読む一人の沙彌にで合った。しかし、この沙彌の法を読む声が「あしかりし」けるので、阿難は仏の教えのに従い誤りを正した。すると、沙彌のいうのには「自分の師匠は老いたる人で誤った事を教えるはずが無い」とし、阿難の言葉には耳を傾けようとはしなかつたのである。そこで、阿難はもはやこの沙彌を諫めても仕方なしとし、摩竭陀国を去るのであった。この事を聞いた毘沙離国の王は摩竭陀国には仏はいないと考え、摩竭陀国を攻撃するのであった。この戦いの話を聞いた沙彌は自分のために多くの人が死んだ事を悲しみ、反省をし自ら火宅入るといふものである。

ところが、「身延山本」では話が異なる。すなわち、阿難の師は「老いたる人」ではなく「若き人」である。しかし、これでは話を理解することができない。話の内容からいえば、阿難の師はあくまでも老いたる者ではなくてはならないし(17)。つまり、これは日意上人が法華経を意識されあえて師を「弟子よりも若き者」とされたものではあるまいか。このように考えなければ話は成立

しない。したがって、ここにも『宝物集』の法華経化を見ることができるといえよう。

#### 四、おわりに

以上、「身延山本」について概略であるが四つの点をとりあげてみた。そして、そこには『宝物集』の法華経化を見ることができるのである。すなわち、日意上人が『宝物集』を書き抜かくさいに説話の内容を法華経の流布に適した話となるように適宜本文校正を行っていることである。諫言すれば、日意上人は釈迦仏あるいは法華経の教理思想のを念頭おき『宝物集』を書き抜かれていたのである。ここには日意上人の書き抜きの姿勢、書き抜きの意図を伺え知ることができるのである。再説すれば、日意上人は法華経の流布に、あるいは、日蓮聖人の残された法華経信仰を門弟に伝えるためにふさわしい話となるように『宝物集』を書き抜き、そして、活用されていったと考えることができるのである。

また、「身延山本」に限らず、日蓮聖人門下は様々説話本を布教資料として布教の場面において活用していたこと想像させるのである。

#### 註

資料として用いた『宝物集』は次の通りであり、頁数は本文中に記した。

身延山本 小泉弘篇貴重古典籍叢刊八

『中世古鈔本宝物集』

光長寺本 小泉弘篇古典文庫第二八三

『古写本宝物集』

九冊本 吉田幸一、小泉弘篇

古典文庫第九八五『宝物集』

また、左記『宝物集』も対照し、その結果を注に記した。

三巻本 「群書類徒」第九五二巻所収。

上野本 「古典文庫」第七七巻所収本（三巻本）。

七巻本 「大日本仏教全書」第一四七巻所収。

1 蓮明阿闍梨日春上人が弘安十年（一二八八）に書写したもの。一巻のみが現存。第二種七巻本では最古の写本。

2 草山元政上人が寛文五年十月（一六六五）までに書写したものの。第二種七巻本に属する。

3 寛文二年（一六六二）までの成立。三巻のみ現存。第二種七巻本に属するも。作者不明。

4 鎌倉末までの成立。四巻のみ現存。第二種七巻本に属する。作者は不明である。

5 今成元昭稿「『宝物集』と日蓮遺文—小泉弘氏の再検討」（『中世文学—資料と論考』所収）二六四頁を参照した。

- 6 古典文庫第二八三『宝物集』二五三頁
- 7 『下商研究紀要』四号を参照。
- 8 右同書二五頁
- 9 一〇三、一〇四頁
- 10 古典籍叢刊八『古鈔本宝物集』「研究篇」一〇六頁による。
- 11 古典文庫等二八三『本宝物集』二二九頁
- 12 右同書二二九頁
- 13 なお、日意上人が行った「本文校正」は、『宝物集』の説話を法華經の教理思想、あるいは、日蓮聖人の法華經信仰に基づいて行ったものばかりでわかない。本文中の誤りを正している場合もある。すなわち、一卷には次のような説示がある。「仲文章ト云ニハ朝ボ父ヲ打シカバ天雷裂其身。西夢母ヲ罵シカハ吸靈蛇其身ナムト申タメレハ、父打母ヲ罵ル者有リケリ」(一五オ)。この説示に対して日意上人は次のような注記をされている「イ本ニハ朝哺父ヲ打シカハ靈蛇ソノ身ヲスウ。西夢母ヲノリシカハ天雷ソノ身ヲサクトアリ」(左側に注記十五オ)。また「光長寺本」と「片活三卷本」は、この「イ本」と同じ説示である。つまり、『宝物集』諸本はいずれも「父を打しかば靈蛇其身をすい、母を罵れば天雷其身裂く」である。ところが、日意上人は「イ本」にはこのようにあることを注記に記しておき、書き抜く際には「身延山」本文のように改めたのである。つまり、誤りを正し

- 14 ているのである。ただし、「身延山本」も完全ではない。正しくは「為怒西夢打父、天雷裂於其身。朝哺罵母吸靈蛇於其命」である。つまり、『宝物集』諸本は二重の誤りを犯しており、「身延山」は西夢と朝哺の名が入れかえっているのである(爪生氏前掲書十八頁参照)。
- 15 「三卷本」「上野本」「七卷本」はともに「臨終正念」となっている。
- 16 「三卷本」「上野本」「七卷本」はともに「金輪聖王」「金峯山」「金光明經」の名を記し、「三卷本」「七卷本」は「三密の鉢」の記事を記している。
- 17 「三卷本」「上野本」「七卷本」はともに「弘法大師」の記事を載せている。また、いずれも、「無尽蔵菩薩」「釈迦多宝」に対しては敬語を用いていない。
- 18 「七卷本」は「我師ハ若キ人ナリ。ヨモ僻事ヲバ教給ワジ」とある。つまり、「九冊本」とは異なり、「身延本」と同じ説示である。この話の出典が明かでないが、これは興味深いことである。